

— 私が出会った青春 —

はじめに

「ドストエフスキ研究会便り」は、今までの13回で、取り敢えず、『カラマーゾフの兄弟』を中心とした考察の掲載が終わりました。続いてこの「便り」の一角に「予備校^{グラフィティ}graffiti — 私が出会った青春 —」というコーナーを設けたいと思います。ここでは、この三十年間に、東京河合塾の本科と、更に河合文化教育研究所のドストエフスキ研究会で、私が出会った若者たちの中から、約四十人について報告をしたいと思います。

日本のバブルの絶頂期からリーマン・ショックを経て現在に至る三十年間、日本が確実に衰退の道を歩む中、その一方で若者たちがドストエフスキと如何に出会い、また如何にその体験を自分自身の現実に生かしていったか、プライベートの問題や、私自身の主観や記憶力の問題もあり、記述が舌足らずとなるところや、曖昧になるところもあるかと思いますが、出来る限り正確かつ多様に、明快な記述で、その証言を残しておくつもりです。

私の夢は、「研究会便り」(1)・(2)で記したように、日本の若者たちを始めとして、全ての日本人がドストエフスキに親しみ、人間と世界と歴史について彼が展開した誤魔化しのない本質的思索に学び、この不条理と不正に満ちた世界の中で、各人がそれぞれの人生を誤魔化さずに深く豊かに生き、出来る限りこの世界を良い方向に変えていってくれることです。

これから紹介する約四十人の若者たちは、当然のことですが、今正に各人の人生を現在進行形で生きていて、一番年上の人は既に五十代に達しています。その過程で大きな挫折を体験した人もいれば、未だ遠くではあれ、夢や目標が視野の内に入ってきたという人もいますが、大部分の人たちはなお暗中模索、苦闘中というのが現実です。しかし苦闘する人は皆、青春を生きているのです。

この「予備校^{グラフィティ}graffiti — 私が出会った青春 —」で、その人たちは、かつて私が彼らの内に見たものを改めて思い起こし、生への励みとして貰いたいと思います。加えてこれは、これを読んで下さる、人生で苦闘中の人たち全てに送る励ましの言葉でもあります。

私の師小出次雄先生が、私の青春時代、残して下さった言葉を紹介します。

「青年よ、人生に惚れ抜け。

人生はやはり素晴らしかった」

恩師の言葉と共に、このコーナーを受け取って頂ければ嬉しく思います。

予備校 graffiti ①

— Kさんの「行き場」—

★三十年にわたるドストエフスキイ研究会で出会った若者たちの中から、まず初めにKさんについて紹介をしたいと思います。Kさんは或る国立大で学ぶ在日朝鮮人三世の女性で、彼女が最初に私の度肝を抜いたのは研究会が始まって間もなく、『罪と罰』をテキストとして講読していた頃のことです。毎回一人ずつ担当者を決めて、その回のポイントを提示してもらっていたのですが、その日の担当者は哲学専攻のY君でした。しかし彼の発表はダラダラとしていて、どうも十分に準備した形跡が見えません。これは一つ叱ってやらなければならない、こう私が思っていた矢先です。Kさんが激しい口調でY君に喰ってかかりました。

「何よ、それ！ 私ね、そんな軟弱なレポートを聞きにここへ来てるんじゃないの。いい加減にしてよ！」

最近NHKで人気の「チコちゃん」の怒りさながらの権幕で、Y君は完膚無き迄に遣り込められてしまいました。他のメンバーも暫くは呆然としていました。

★この時の打撃からか、翌月の研究会にY君は顔を出しません。しかし彼の欠席を知ったKさんは言いました。

「フン！ 私の言葉程度で、ここに出席が出来なくなるような軟弱な人だったんなら、初めから来る必要などなかったのよ！」

私は再び度肝を抜かれました。

★Kさんは、同じ在日の人たちが日本での辛い体験から、どうしても心を祖国に傾けがちになることを嫌い、祖国回帰のメンタリティを自ら強く拒否する人でした。それは逃げでしかないと言うのです。ではKさんの心はどこに向かったのでしょうか —— 二つの方向、二つの国。つまり一つは中国、他の一つはロシアです。

★まず中国。この国の文化は日本民族と朝鮮民族の文化の共通の根と言うべきものであり、中国文化を深く知ることで、自分は日本と祖国とを共に相対化出来る視点を与えられる

だろう。もう一つのロシア。これはドストエフスキイを生んだ国であり、この作家にぶつかり学ぶことで、日本民族も朝鮮民族も、また中国の諸民族も、共に自分の狭さと小ささを離れ、より大きな精神の場に出ることが可能なはずだ。これが彼女の直観と確信でした。これには私は度肝を抜かれるというより、感動させられ学ばされました。

★Kさんは『罪と罰』に出てくるマルメラードフという酔漢が言う「どこにも行き場がない」という言葉が好きでした。自らが立つ場を「行き場のない」場と捉え、その上で積極的に中国とロシア、二つの方向に超え出てゆくこと、また過去を見据えた上で、更に先へ先へ、未来へ未来へと進んでゆくことを目指したのです。ドストエフスキイ研究会に参加し、毎回彼女が見せた激しい気迫と鋭い眼、そして周到な準備。それらは皆、彼女の人生へのこのような姿勢から出たものだったのです。

★私はそれから後に書き上げた『罪と罰』論を、是非Kさんに読んでもらいたいと思っています。この本が、最近書き上げた『カラマーゾフの兄弟』論と共に自分のライフ・ワークであり、ドストエフスキイへの私の応答であり、またKさんへの応えでもあると思っています。しかしその後、彼女とは連絡がとれていません。彼女は中国の大学への留学を終えた後、その経験を生かして中国語の通訳として活躍しているとの噂で、実際には何も心配してはいないのですが・・・

★何回か後にここで紹介するS君と共に、Kさんは日本に侵略され支配された民族の辛さを背負い、「どこにも行き場がない」窮境の中で、決して否定的な方向に答えを出さず、ひたすら肯定の方向に積極的に新しい人生を切り拓いてきた人たちの一人です。彼女の弟さんも、姉に劣らず激しい生を生きる青年で、彼は日本での生に飽き足らず、新しい映画製作の可能性を求めてアメリカに渡りました。

★私は二人の先生でしたが、頭を下げて学ぶべきは自分の方だと常に思っています。そしてドストエフスキイという作家がこのような形で、切り離された民族と民族とを再び繋ぎ合わせる力を持ち、「行き場」のない人々に真の「行き場」を与える人であること、そしてまた彼の文学が、愚かな政治家たちや軍人たちが、そしてそれに引っ張られた国民、あるいは迎合した国民がアジアにまき散らした大変な負の遺産を贖い癒す可能性を持つ文学であること、これらを教えられたことに心から感謝をしています。

★なおY君のことですが、ここに紹介しただけのY君では、彼の立つ瀬がありませんね。何時の日か、彼がドストエフスキイに対して示した姿勢、殊に『カラマーゾフの兄弟』を読んで示した素晴らしい反応のことを報告することも、私の義務だと思っています。

(この項、了)

予備校 graffiti ②

－ 自転車で乗り越えた挫折と、運命の「招待状」 －

★M君は信州のリンゴ林に囲まれて育ち、河合塾での浪人の後、早稲田大学の社会科学部に入学しました。当時の早大の社会科学部は二部・夜間の学部で「社会学」と呼ばれ（2009年に昼間の学部に移行）、ユニークで素晴らしい先生たちや生徒たちが集まる場であるにもかかわらず、他の学部を失敗して駆け込む生徒も多く、早大の中で挫折感を抱える生徒が多いと言われていました。M君よりも数年前に「社会学」に入ったS君は、しばらくして私を訪ねてきて、「社会学」で歌われているという「玩具のチャチャチャ」の替え歌を、大きな声で自虐的に歌ってくれたりもしました。S君は持ち前の明るさで、「でも、俺、お陰様で、人の辛さを分かる力も身に着きつつあるような気がするな」と語り、やがて遅しく勉強に打ち込む生徒さんになりました。M君も入学当初は、その挫折感に強く捕らわれた一人でした。しかし彼もまた、その挫折感をユニークに乗り越えたのです。

★M君は挫折感を克服するために、また自らの青春を証^{あかし}するためにも、しばらく大好きな「自転車」に徹底的に乗って乗りまくろうと決めました。故郷の信州と東京との往復は言うまでもなく、夏休みになると九州の最南端にまで自転車を走らせ、自転車に青春の情熱全てをぶつけたのです。（九州行きは、想いを寄せる女性への「告白」のためでもあったということは、ずっと後に聴かされました。その成否については、残念ながら覚えていません）

★やがて彼は自転車の目線から、信州ばかりか日本という国が持つ美しさを目覚めさせられると同時に、どんどん進行してゆく日本の自然環境破壊の凄まじさにも気づかされてゆきました。日本が高度経済成長期からバブル期へと突入する頃だったのです。或る時、某新聞の懸賞論文で「自然環境破壊をどうするか」という趣旨のテーマが出され、彼は日頃自転車で培った視点から論文を書き上げて応募し、入賞者の一人に選ばれました。

★入賞者の何人かはイギリスへの旅と、来日中のサッチャー英国首相と対談する機会を与えられました。そしてこの対談の場で、他の入賞者たちが「世界の情勢は？」とか「チェルノヴィリ原発事故の後、ソビエトの未来は？」「日英の関係は？」というような政治上の問題を専ら質問する中で、この雰囲気^{雰囲気}に飽き足らなくなったM君は、自分が書いた論文の延長線上で、サッチャー首相に日本の自然の美しさと危機とを語り、最後に「サッチャーさん、僕の家は信州の片田舎ですけれど、日本の美しさが残った素晴らしい所です。一度ここへ遊びに来て、リンゴを食べて下さい！」と語りかけたのだそうです。

★来日以来、政治・経済の話ばかりで少々辟易していたサッチャーさんにとり、信州のリンゴ畑への招待は、思いもかけない新鮮な驚きだったようです。自転車という角度からM君が見続けた日本の現実、そこには世界の現実もそのまま映し出される鋭い洞察があったのでしょう。感動したサッチャー首相は、残念ながら今の私は余りにも多忙で、あなたの信州を訪問することは出来ないが、あなたが今度ロンドンにおいての際には、ぜひ私を尋ねて来なさいと言ってくれたのだそうです。真偽を計りかねている内に、実際にサッチャー首相からの「招待状」も届きました。それを驚掴みにし、予備校の講師室に飛び込んできた時のM君の弾んだ息と、輝いた顔が忘れられません。(その招待状を私はコピーさせてもらい、今も大切に持っています)。彼の「社会学」の挫折は克服され、代って彼の青春は、この「招待状」によって一つの見事な華を開かせたと言うべきでしょう。

★卒業後、M君はある放送局の記者になりました。ところが彼はその後、アメリカで大変な悲劇を体験することになります。その悲劇についてはここに記すことは出来ませんが、運命は彼に、新たに残酷な「招待状」を送り付けてきたのです。長い音信不通の後、彼は再び私の許を訪ねてくれ、その挫折から立ち直りつつある姿を見せてくれました。この悲劇をも完全に乗り越え、更に大きな活躍をするようにとの新たな「招待状」を、運命はきっと彼に送ってくれるに違いありません。

★その後私は、早大の「社会学」に入った生徒さんから、この学部の理想像は「心に地球儀を持った学生」を育てることだされていると聞きました。素晴らしい理想像です。しかしその心の地球儀に、ただ世界各国の観光地やグルメの有名店やブランド店などが記されているだけでは、なおバブルの病に侵された能天気な心の地球儀でしかないでしょう。M君の場合、彼の心の地球儀には日本と世界の自然環境破壊が刻まれ、サッチャー首相との会話やイギリスでの体験が記され、更にはアメリカで体験した大変な悲劇が刻印されていることは容易に想像がつきます。彼はこの地球儀に刻まれた光と闇の中から、彼自身の光を見出し、自分自身で新たな地球儀を創り出すに違いありません。M君の検討を祈り、改めて声援を送ります。

★私はM君にドストエフスキイを読むことを勧めました。M君が体験した、そして体験しつつあることの全てが、正に「ドストエフスキイ体験」だと感じられたからです(「ドストエフスキイ体験」については、「研究会便り」の別コーナー「ドストエフスキイの肖像画・肖像写真」の始めを御覧下さい)。ドストエフスキイとは、次々と自分を襲う言語道断の闇の向こうに光を見出すことを求め、事実それを果たした作家です。M君はドストエフスキイからも、きっと何かを学び取ることでしょう。彼に私は、このロシアの作家からのもう一つの「招待状」を届けたのだと思っています。(この項 了)

予備校 graffiti ③

— 「ひまわり畑」と「エベレスト」と「トランペット」 —

★今回は三人の若者、U君・F君・M君たちと「海外」というテーマをまずは軽いタッチで記し、その後でM君について、改めて記したいと思います。

★U君は浪人二年目で、スペイン語学科志望でした。ある日彼は、講師室で質問を終えると、改まった調子で語りかけてきました。

「先生、俺、いつか写真で見たスペインのひまわり畑を実際にこの目で見てきたいんです。見渡す限りのひまわりの前に立った時、俺の人生が始まるって思い込んでいるんです。俺キザかな？」

キザどころか、私はこういう夢のある青年や、目先のことに囚われない大学志望の仕方が大好きです。ドストエフスキイは、人類が減びる時、神の前に差し出すべき本が一つあるとすれば、それはスペインのセルバンテスの『ドン・キホーテ』だと書いています。私にもスペイン人の友人がいますが、彼も夢に生きるドン・キホーテが大好きで、しかもドストエフスキイの専門家であり、日本のアニメも大好きで、アニメを介して日本語の単語も相当多く知っています。この明るく心の広い彼一人を介しても、スペイン民族が大民族の一つであることを強く感じさせられます。個人的にも、世界の町々の中で私が最も感動した町の一つはトレドです。

誰かU君に続いて、大学時代、スペインを訪れ、広大なひまわり畑の真中で、『ドン・キホーテ』を読もうという人はいないでしょうか？！

★ある時、新宿駅の地下通路で声をかけられました。日に焼けた優しそうな顔をしたF君でした。

「先生、僕、アジアを中心に旅をしています。色々な山にも登っていて、大学生活の最後は、エベレストです」

「エッ、君、そこまでやるの？」

「いえ、登攀はさすがに無理だから、出来るだけエベレスト近くの、出来るだけ高い所まで行って、あの山を見てきます。僕の青春、それを一つの転換点にしようと思っています」

これもキザどころか、私は驚かされ、そして感動させられました。ひまわり畑、エベレスト —— 二十代、皆さんはどのような「夢」を持ち、実現するでしょうか？

★ジャズ好きのK君は、日頃青春の情熱を公園などに行きトランペットにぶつけていました。友人との卒業旅行で、ドイツへ行った時のことです。或る町を流れるライン川のほとりで、彼は持参した愛器を吹き鳴らしていました。すると或る市民から（警察ではなく）新聞社に通報され、写真入りで取り上げられることになりました。この市民は彼のトランペットに感動したのです。この時の写真入りの新聞を、私にお土産として渡してくれた時の彼の、はにかんだような嬉しそうな顔が忘れられません。

二十代、K君が情熱をぶつけた対象はもう一つ、ドストエフスキイです。ドストエフスキイ研究会に十年間も出席し続けた彼は、『罪と罰』のほぼ全データを頭に入れてしまいました。私が何処から質問しても、彼は『罪と罰』について、その質問に対する何らかの答えを返すまでになりました。その詳細かつ正確な知識は、恐らく今の日本のどのロシア文学者、ドストエフスキイ研究者にも劣らぬものでしょう。

世にドストエフスキイ好きの人は多いのですが、どちらかと言うと、ドストエフスキイに託して自分の情熱を語りたいたいという人が多いように思われます。このことも大切なことですが、ドストエフスキイ研究会では、メンバーはまずテキストそのものの正確な把握を要求されます。最初に紹介したKさんも、そしてこのK君も、『罪と罰』のテキストの前に自分を消して、まずはドストエフスキイの思想を正確に受け止めるという訓練をしたために、大きく成長したように思います。ドストエフスキイと取り組むのに最も必要なものは、我々の「主体性」であることは言うまでもありません。しかし主体性とは、自分自身を消すことが出来る姿勢でもあるのです。

三十代のK君はIT関係の仕事をしながら、今度は『カラマーゾフの兄弟』に的を絞っています。しかし三十代の働き盛り、彼の専門分野の仕事は厳しく、また奥さんやお子さんたちにも恵まれた彼は、この闘いと幸福の中で、果たして何処まで二十代の『罪と罰』と同じレベルで、これよりも更に巨大なカラマーゾフの世界を自分のものと出来るか、大きな壁の前に立たされています。しかし私は、結局彼がやり遂げてくれると信じています。そして四十代になって、彼が新たにどの作品と取り組むのか、今から楽しみにしています。

（この項 了）

予備校 graffiti ④

一 暗記・暗唱の努力が開いたもの 一

★予備校の授業で私は「暗記」ということの大切さを強調してきました。ただの「丸暗記」「棒暗記」ということではありません。学習し理解したことを頭の中に「キチッ」と納め、その上で自在に使いこなせて初めて、知識は力となるのです。ですから私は生徒さんたちに、頭に知識が整然と入ったかどうか、絶えず「暗記・暗唱」を試みて、自覚的に厳しくチェックすべきだと言っています。ところが予備校に来るまで、このような作業をせずに、ただ「丸暗記」はいけないということだけを「丸暗記」している生徒さんが多いのです。そういう人は何かを学んだ場合でも、学んだという事実のみで満足してしまい、それを新たに頭の中に刻み込み、自分のものとするという努力を疎かにしてしまいがちです。そういう中で、浪人時代の徹底的な「暗記・暗唱」の努力が、入試ばかりか人生の突破口をも開いた典型例が、H君です。

★H君が私の前に現れたのは、五月の始め頃だったと思います。「授業は進んでゆくのですが、テキストはきつく、英語は相変わらず苦手で、ただ焦りばかりが募ってきます」。このような嘆きを語ったH君と私との間に交わされた会話は、以下のようなものでした。

「先生は、授業の復習をして、理解が出来たら、その後はテキストを白文で繰り返し速読し、暗記・暗唱にまで持ってゆくとよいと言われます。でも具体的には、何回読んだらよいのですか？」

「君自身は、何回だと思う？」

「五～六回というところでしょうか？」

「甘い！ その十倍は読みなさい！」

「はい、わかりました。やってみます」

H君は礼儀正しくお辞儀をして帰ってゆきました。

★ひと月ほどが経って、H君が再び現れました。

「先生、さすがの鈍い僕も、何十回と読んでいる内に、いつの間にか文章が頭の中に入ってくるようです。僕がここで言うてみますから、済みませんが、チェックをして頂けますか？」

講師室で、彼の大声での暗唱が始まりました。他の先生たちや、質問に来る生徒さんたちも、何が始まったかを見つめる中でのことです。

★どんどん難しく長くなるテキスト。毎週の暗記・暗唱という作業は大変だったに違いありません。しかしひとたび私に「宣言」をしてしまい、講師室で暗唱を始めてしまった以上、もう引くに引けません。彼は懸命に暗記と暗唱を続けました。「習うより、慣れろ」。彼の力は確実に増してゆきました。

★H君はその後、苦手だった英語を得意科目としてしまい、大学では英語を専攻し、私のドストエフスキイ研究会でも四年間休まずに学び続け、卒論も見事に英語で書き上げ（今はここまで出来る大学生は、ごく少数になってしまったようです）、そして大学院に進みました。家庭の不幸にもじっと耐え、アルバイトを黙々と続け、全て自分で貯めたお金でイギリスへの留学も果たし、イギリスの良いところを頭と心に一杯に詰めて帰ってきました。そして今はある高校で英語を教えています。皆さんの中にも、彼に学んだ人がいるかもしれませぬ。彼はきっと暗記・暗唱を強く勧めていることでしょう。私もいつか、是非、彼の授業を見学させてもらいたいと思っています。

★その後H君と食事をしながら話をした時のことです。驚いたことに、彼は予備校時代のこと、イギリスでの勉強のこと、ドストエフスキイ研究会のこと、そして私が語ったことなどを（幼い娘と私がした喧嘩のことまでも！）、実に詳細かつ正確に覚えているのです。これは「丸暗記」などととは全く違う類の、正確かつ良質な「記憶」だと私は思いました。物事を正確に把握して頭の中に収めるということの大切さと素晴らしさを、彼は私に改めて教えてくれました。そこにあるのは人間に対する誠意、そして生きることに對する真摯さと好奇心でしょう。私は英語専攻のH君に、是非ディケンズとドストエフスキイを学ぶようにと進めたのですが、彼はこの大変な課題も確実に心に受け止めてくれていて、いつかその成果を報告してくれるに違いありません。この「予備校 graffiti」が生まれたのも、私の口述を彼が根気よく丁寧に書き留めてくれたことが一つの契機となっています。

★受験生に私はいつも次のようなアドバイスをしています。

その日テキストで出会った表現、あるいは人の言葉、あるいは新聞やテレビで目にしたことで、「これは！」と心を打たれることがあったならば、それを一語でも、一センテンスでも暗記してしまおう！ それを寝る前に思い出してみ、もしそれが正確に蘇らなかつたならば、もう一度起き上がって暗記をし直し、暗唱を試みよう！ —— さもなければ、その日は「無」ですよ！！（少々「脅し」も交えています！）。 （この項 了）

予備校 graffiti ⑤

－ スッチー・Tさんのドラマ －

- ★Tさんの子供の頃からの夢はスチュワーデスになって国際線に配属され、世界の空を飛び回ることでした。ところが実際に夢がかなうや否や、彼女の心に湧きあがったのは、なんと「辞めよう！」という思いでした。人間の心の不思議さと面白さです。

- ★辞職の直接的な原因としては人間関係、特に乗務員間の上下関係の理不尽さに嫌気がさしたこと、また国際線に乗る日本人の精神的レベルの低さに絶望したこと、この二つだったようです。ファースト・クラスやクラブ・クラスに乗る人たちがチラッと見せるエリート意識が、彼女には田舎者根性そのものに思え、このような連中に愛想を振りまき、サービスをし続けることなど、本来の「夢」ではなかったと悟ったというのです。「もういい!」。大雨後のセヌ河の濁流を見詰めながら、彼女は最後の決心をしたそうです。

- ★辞表を出したTさんは、アメリカの大学に入学します。彼女自身の回想によれば、数枚のTシャツしか持たず、覚悟一つの渡米だったそうです。アメリカ留学というと、日本経済の高度成長期からバブル期にかけて、十分な英語力を身につけず出かけてゆき、結局は仲間で群れて終わることが多かった日本の若者たちを傍目に、Tさんは必死に勉強を続けました。予備校で学んだ「五文型」や「分離動詞句」や「基礎動詞」についての知識が、実は英語の習得の上で如何に大切かをここで実感できると報告してくれたのもこの頃です。そして大学から大学院へ、英語が深く身に着けば着くほど、アメリカを知れば知るほど、彼女にますます切実に感じられて来たこととは、自分は実は日本のことは何も知らない、日本をもっとよく知らなければということでした。

- ★祖国についての無知。これは祖国を離れ外国に深く触れれば触れるほど、誰もが持つ実感です。この実感をどう生かすか、ここにその人の外国体験の質や、更にはその後の人生の奥行きまでも左右してしまう決定的な分かれ道があります。この時Tさんが心に決めたことは、以前から好きだった遠藤周作を改めて本格的に読み、この作家がキリスト教を巡って日本と西洋世界との出会いをどのように捉えたのか、自分自身の身に引きつけて考えようということでした。

- ★大学院の卒業後もアメリカに留まったTさんは、シカゴの或る金融系の会社で自分の個室オフィスまで与えられ、バリバリと働き続けます。そのままゆけば恐らくは、アメリカのビジネス界の最前線で最も活躍する日本人女性の一人となっていたことでしょう。

一時帰国をして、これから再びアメリカへ戻ろうとするTさんと、たまたま私は成田空港で出会ったことがあります。この時一人空港のラウンジに立つTさんの姿が、ビジネス・ウーマンとしての厳しい、怖いくらいのオーラを発していたことを思い出します。

しかし日本について、そして人間について考えるという新たな課題を持つに至った彼女は、パリでの決断に続いて、またもアメリカで一つの決断に至ります。シカゴでの仕事を整理し、次のステップを日本で踏み出そうと決めたのです。

★十年余のアメリカ生活に終止符を打ち、Yさんは日本に帰りました。三十代後半からの日本。彼女が自らに課した新しい課題は、今までの体験を土台に、改めて正面から人間の心に目を向け、人間の心の中で進行する喜びや悲しみや悩みに寄り添い、そこから新たに日本と世界との接点を見出してゆこうというものでした。その具体的な方法として遠藤周作と取り組み、心理学を学ぼうと決めた彼女は、ある専門学校で心理学関係の勉強を積み、結婚後の今は地方に暮らしています。日本の小都市で家庭という場を土台に、また英語力を生かして学習塾も開き、新しい挑戦が始まったのです。最近も遠藤周作関係の映画を観たと言って、その感想を伝えてくれました。私は日本の地方の小都市の小さな学習塾に、このような先生が増えてゆくことこそ、日本の文化が底を広げ、深みを増す一歩になると信じています。多くの子供が学びにゆくといいですね。

★一人の人間が自分の真の課題を見つけ、社会・世界の中で自己完成を計ろうとすると、実に多くの「時間」と「努力」、そして「試行錯誤」が必要となります。特に女性については、これからも色々な人の例をここに紹介しますが、エリートと言われる医師や弁護士^{の道}でさえ、まだ日本には色々な障害が横たわっています。しかし今回のKさんとTさんの例が教えてくれるように、何よりも肝心なのは、まずはその人自身が「夢」を持っているかどうか、それに向かう「勇気」と「覚悟」を持つかどうか、そしてそれに向かって地道な「努力」が出来るか否かということに尽きると思います。

私は恩師から「人間六十歳までは修業期だ、それまでは生意気な事は言わず書かず、ひたすら勉強に励め!」、このように繰り返し言われました。私も若い人たちに対して常に、「取り敢えず二十代・三十代は修行期!」と言い続けてきました。このことは男性の場合でも女性の場合でも、変わらぬ真実だと思います。(結婚についても、年齢のことばかり気にせず、いい加減な妥協はしないこと。自分が選んだ専門の分野で修業を続ける間に、必ず心が通じ合える素敵な人と出会うはず。順番を間違えないように!)

この「予備校^{グラフィティ}graffiti — 私が出会った青春 —」の受け止め方は様々にあると思いますが、人間の「修業期」という角度から読んで頂いても、一つ参考になるのではないのでしょうか。

(この項 了)

予備校 graffiti・①～⑤・余録

第一回目を終えて

★毎回、何人かの人たちについて紹介しつつ、新たに見えてきたこと、改めて考えたことを、「余録」として少しずつ記しておきたいと思います。

まず今回気づいたことは、紹介した人たちに共通する「海外体験」ということです。「海外体験」と言っても、この人たちのそれは、バブル的な「海外旅行」などではなく、それぞれが全く性格を異にするものであり、それぞれの人生を賭けた「旅」、或いは人生が決定されるような「海外体験」であること——このことがはっきりと浮かび上がり、私は改めて驚かされました。それだけ明治の開国以来、日本が国際世界の中に組み込まれ、殊にここ数十年は、激しい国際化の波の中に巻き込まれ、若者たちがその波の中で自己形成を迫られるようになったということなのでしょう。

★明治以来の国際化の流れということで、Kさんについて一言付け加えておきます。

福沢諭吉はその啓蒙の総決算の書とも言うべき『文明論之概略』(1875)で、日本が西洋列強の海外進出、否、海外侵略の荒波の中に巻き込まれた事実を指して、「国際交際の病」と表現しました。彼は国際間で繰り広げられつつある激烈な弱肉強食の戦いの現実を「病」とまで呼ぶことで、広く日本人に注意を促し、「富国強兵」を唱え、自国をまずは不動の強国に作り上げることを説いたのでした。それが明治政府の国体神話創作と呼応する形で、結局日本をアジアへの侵略・支配という悪魔道に導いてしまったのです。その延長線上にKさんたちの悲劇があり「海外体験」があることを、我々は直視しなければなりません。そしてKさんが自ら選び取った人生の道、新たな「海外体験」について襟を正して見つめ、それに学ぶべきでしょう。日本が体験しつつある新しい「海外体験」が、「歴史意識」を欠いているとしたら、それは恥ずべきことです。

★しかしここ数十年の日本人に関する「海外体験」は、若い人たちに焦点を絞る限り、以前の「お上りさん」的な「海外旅行」とは異なる次元にきて、新しい可能性を孕むものとなったように思われます。今回紹介した全員にとって、「海外」とは自分の小さな枠を破り、大きく成長する跳躍台となったのです。

(M君は海外で新たな試練と出会うのですが、この試練を彼は乗り越えつつあります)。これからここで紹介する人たちも、それぞれの生に「海外体験」が大きな位置を占め、皆さんの参考となることでしょう。この「海外体験」の問題について、また「国際交際の病」の問題については、なお繰り返し考えてゆかねばならないと思います。

★もう一つ、H君の「暗記・暗唱」ということですが、これから「予備校 graffiti」に取り上げる人たちにも、実は「暗記・暗唱」と本気で取り組んだ人が多いのです。この点についても、改めて次回の「予備校 graffiti・余録」を始め、色々な角度から取り上げましょう。

(2019年2月)

予備校 graffiti・もう一つの「青春」

毎回「予備校 graffiti」の最終ページに、「もう一つの「青春」」として、恩師小出次雄先生のデッサン・絵画を付します。(今回はモジリアーニの作品を基にしたデッサンです)。全部で六枚紹介する予定ですが、若い頃私は、それぞれが「青春」の持つ独自の相貌を表現するものとして、強く心を揺さぶられました。本文の文章とはまた違った角度から、これら六枚を皆さんの「青春」と重ねて鑑賞し、「青春」を考える素材として下さい。